

万物皆命あり・万物皆心あり（二）

幼児期からの いのち と こころ の教育

照 屋 敏 勝

人間は「4階建て」と考えることができる。1階は「肉体の部屋」である。2階は「感情の部屋」である。3階は「知性の部屋」である。4階は「心の部屋」である。幼児期からそれぞれの部屋の教育は大事であるが、最も重要なのは4階の「心の部屋」の教育である。他の部屋は動物も多少なりとももってるが、「心の部屋」は人間特有のものである。したがって、人間の教育は幼児期から「心の部屋」の教育をもっとも重視する必要がある。

キーワード：保育・幼児教育，4つの価値感情，四無量心，豊かな人間性，心の教育

はじめに

前稿においては、＜いのち＞の教育を中心に考察をすすめてきたが、本稿においては、＜こころ＞の教育を中心に論考をすすめることにする。しかし、＜こころ＞の教育はむずかしい課題である。＜こころ＞の教育というものが単独で存在するわけではない。教育は影響の総和であり、諸活動の結果である。＜こころ＞の教育においても同じである。身体教育も、感情教育も、知的教育も、社会的教育もすべて＜こころ＞の教育に関係してくる。＜こころ＞の教育のみを取り出して教育することは危険である。純粹培養になってしまうおそれもあり、いろいろな要素が純粹でないという理由で排除されるおそれもある。つまり、多様性が排除されるのである。政治の世界においても、「純粹なもの」や「美しいもの」が政治的スローガンに使われると危険でもある。ドイツのヒットラーはドイツ人の「純血」を守るという理由で、ユダヤ人の大量虐殺を実行した。日本の軍国主義

時代においても「國体の粹」を護るという理由で、多数の戦争反対者やリベラリストが「國賊」や「非國民」という、およそ真実とは無縁なレッテルをはられて投獄され、抹殺された歴史がある。国民の中にゆがめられた感情や虚偽意識が一つの勢力をもちはじめるときわめて危険である。太平洋戦争においても、この「勢力」が軍部や軍需産業と戦争を推進した政治家たちの戦争を支持し、拡大していったのである。

＜こころ＞の教育は大切であるが、十分な配慮が必要である。心の教育はいつも独走や暴走する危険性をはらんでいるからである。

＜こころ＞の教育

1. ＜こころ＞を考える6つの視点

- (1) かたまりやすさとこわれやすさ
- (2) あいまいさに対する寛大さの欠如
- (3) 残虐性
- (4) 無関心
- (5) 両極性

(6) 画一性

2 . 人間は「四階建て」である

人間を建物にたとえて考える考え方がある。人間を何かにたとえたほうが理解しやすいからである。夏目漱石が日本人の精神風土を1階は「和室」、2階は「洋室」にたとえたのもそういう考え方の一つである。「和魂洋才」も一つの建物と考えることができる。1階は「和魂の部屋」であり、2階は「洋才の部屋」である。

人間は「四階建て」にたとえたほうが理解しやすい。

1階は「肉体と物質と本能の部屋」である。

衣食住や労働、休息、就寝、性行動、育児、運動、感覚、遊びなどにかかわる部屋である。人間の生活の基礎的な部分である。この部屋は動物ももっている。人間だけの部屋ではない。＜こころ＞を育てる上でもこの部屋の生活を豊かに充実させる必要がある。

2階は「感情・情緒と意欲・心情の部屋」である。

人間の一般的情緒としては喜怒哀楽が考えられているが、人間の基本的感情としてはもっと多様なものが考えられている。驚き、楽しみ、喜び、怒り、恐れ、得意、不安、反抗、嫌悪、誇り、愛、恥じらい、罪悪感、悲しみ、好奇心、期待などである。

感情および意欲は人間の生活と行動の原動力である。したがって、感情の教育と意欲の育成は幼児期からの重要な課題である。

この部屋は動物ももっているが、乳幼児の教育においては特に重要な部屋である。豊かな感情を育てることおよび感情をコントロールすることや自己抑制はこの部屋の教育においては大事な課題である。感情教育は感情分化期の重要

課題である。

3階は「思考・認識と知性・創造性の部屋」である。

「人間」はインドから中国経由の外来語であり、佛教語であるが、インドの古代語であるサンスクリット語ではmanusya-loka（マヌシャ・ローカ）と表現される。manusyaは「考える」という意味の言葉である。「考える」は人間の重要な特性である。痴呆症（現在は認知症）は人間の「知」（考える働き）が病気におかされて、正常に機能しなくなり、その結果、その言動が乳幼児のようになってしまうという意味である。「考える働き」が人間を人間らしくしているのである。

考える力を育てることと創造性を育てることは密接に結びついている。価値ある発見や創造のためには集中的思考が必要であるが、そのためには拡散的思考が前提となっている。物事を多面的に考察することによって、その本質が次第しだいに明らかになってくる。

創造性を育てるためには、幼児期から創造性のいくつかの大事な要素を育てることが大切である。1つは意欲であり、2つは思考力であり、3つは表現力である。これら3つは創造性の三要素である。優れた教師（保育者）や聡明な親の特徴の一つは子どもの意欲の育て方がうまいということである。意欲が育てば子どもは自発的に動くようになるものである。意欲は行動の原動力である。表現力を育てるばあいは5つの表現領域を考える必要がある。つまり、身体的、音楽的、造形的、言語的、演劇的表現領域である。

この部屋は部分的には動物もっており、人間だけの部屋というわけではない。しかし、思考や創造性の点で、動物と人間の間には著しい差があり、その意味ではかなり人間的な部屋で

あるともいえる。

4階は「心・魂と情操と宗教の部屋」である。

この部屋は人間だけの部屋であり，人間独自の部屋である。したがって，この部屋の教育は人間の教育の中では最も重要な教育である。ここにおいて教育の集大成が行われるともいえる。それだけに，この部屋の教育は，教育の功罪が最も顕著に現れるところでもある。ここでの教育が，その子どもの幸福な未来を準備するようなものであれば共に喜ぶことができるが，虐待や家庭崩壊などに遭遇すると，その子どもの内面に生涯消すことのできない後遺症を残すことになる。

人間は心をもっているがゆえに，その内面生活が豊かになり，幸福を享受することもできるが，その心が病むと人間を苦しめることになり，回復へのもがきが続くことになる。心は両刃の剣なのである。

古人の歌にも「心こそ心迷わす心なれ心に心心ゆるすな」という道歌がある。心は制御しがたい対象である。心は状況によって三態に変化する。「固体」にもなり，「液体」にもなり，「気体」にもなる。心は硬くなったり，柔軟になったり，空気のように消えたりする。そのことは心の教育のむずかしさを示しているわけでもある。

心や情操は特訓によって育つものではない。したがって，幼児期からの持続的な，ていねいな教育の積み重ねが必要である。教育はもともとささいなことの積み重ねである。

宗教も同じである。宗教を特効薬のように考える人もいるが，宗教は特効薬ではない。宗教を特効薬のように考えるとときわめて危険である。宗教をそのように考えると，しらずしらずのうちに，洗脳や狂信，マインドコントロールや呪縛，独善や排他，暴走や虐殺など，およそ

宗教とは無縁のものが人々を支配するようになる。宗教は特効薬ではなく常備薬である。日常の社会貢献やボランティア活動，各種の支援・援助活動や相談活動などが大切であり，生活や勤めにおける反省や自己点検が必要であり，人生における生き方の誤差の修正が必要であり，日々の生活における祈りや感謝や癒しが必要である。

宗教教育においては，特定の宗教への信仰心を育てるのが目的ではなく，人間としての宗教心を育てることが肝要である。

3．四つの価値感情

情操とよばれる感情は価値をもった感情である。喜怒哀楽のような感情は価値をもっているわけではない。保育や教育において目標とされる感情は価値感情である。ある保育園の保育目標の中に「喜怒哀楽の表現できる子ども」という目標があるのを見て，疑問に思ったことがある。「喜怒哀楽の表現できる子ども」は目標に向かっての初期段階のねらいとしては考えられるが，最終目標としては不適切である。感情領域における目標としては「情操豊かな子ども」や「思いやりのある子ども」のような価値感情が設定されるのが通例である。なぜなら，保育・教育活動は価値実現のための活動だからである。

四つの価値感情は真・善・美・聖の四つの文化的価値からそれぞれ派生するものである。

(1) 知的情操

知的情操は真理や科学にかかわる情操である。植物の種をまいて何日かすると，芽が出てきて，やがて葉っぱがでてくる。トマトの茎に花が咲き，やがて小さなトマトが生まれてくる。

飼育している鶏の卵から雛が孵化する。山羊やうさぎから赤ちゃんが誕生する。これら一つ一つの誕生物語は幼児や子どもにとっては大きな驚きであり、感動である。生命誕生の神秘的な姿であり、不思議に満ちた現象である。そのような感動体験や不思議体験が知的情操である。子どもにとって驚きや感動は学びへの出発点である。

（２）道徳的情操

道徳的情操は「善」に集約されるように、人としての道や徳性にかかわる情操である。力のよわい者を助ける。困っている人を助ける。目の不自由な人が道に迷っているのを助ける。電車やバスの中で老人や障害者や妊婦に席を譲る。人に親切にする。災害地の人々のために募金をしたり，ボランティア活動をしたりする。アジアやアフリカの飢えに苦しんでいる子どもたちのために募金をする。

このような具体的行動だけではなく，そのような援助や助力を必要とする人々に常に関心をもつということも大切である。

人には人としてふみおこなうべき道があり，その道が道徳や倫理というかたちで集約されている。助け合いや連帯の精神はいつの時代にも必要である。青少年やおとなのボランティア意識も以前とくらべるとかなり高くなってきている。今では，大災害のあとには多数のボランティアの人たちが復旧活動に参加している。私も学生時代に6000余の人々が亡くなった伊勢湾台風の災害地であった名古屋市に入って，1週間ほど児童福祉施設の復旧活動に参加したことがあるが，当時はまだまだボランティアの参加はわずかであった。「ボランティア」という言葉そのものが日本にはまだない時代であった。

子どもの心の教育を考えるばあい，この道徳

的情操や人間的感情をどう育てるかは大きな課題である。教育計画全体や保育形態・保育方法などをそのような観点から見直す必要がある。

（３）美的情操（芸術的情操）

美的情操は芸術的情操ともよばれる。美や芸術にかかわる情操である。

人間は長い歴史の中で多数の美や芸術を創造してきた。絵画，彫刻，音楽，文学，演劇，建築など多岐にわたる領域で無数の作品を生み出してきた。古代から美は人間の魂の本姓を回復するものと考えられてきた。しかし，美は人間が創造してきたものばかりではない。自然の中にもいろいろな美が存在している。

すぐれた芸術は万人を同一の感情で結びつける性質をもっている。美は人々を結合し。統合する働きをもっている。それは人間が創造した芸術作品であっても自然の美であっても同じである。現在では，ユネスコが人類の文化遺産や自然風土を「世界文化遺産」として指定し，保護するようになっている。国内においても，「国宝」や「重要文化財」や「天然記念物」として指定し，保護されている。

芸術は心の癒しや心の治療にも活用されている。音楽療法や芸術療法などがそうである。音楽や絵画とかかわることを通して心がほぐされ，生気をとりもどすようになる。子どももおとなも，管理社会やストレス社会の中で，心が常に危機的状況にさらされている。

幼児期から美とのふれあいをどう組織していくか，美に対する鑑賞力をどう育てていくか，美を生活の中にどう取り入れるか，などは保育・幼児教育の重要な課題である。

（４）宗教的情操

宗教的情操は宗教や聖性や神性や仏性にかか

わる情操である。

英語のreligionはラテン語のreligare(結合する)やreligio(畏敬)に由来するといわれている。宗教は超越者への絶対帰依の世界であり、必然的に<畏敬>が生ずる。しかし、大事なものは宗教の結合機能である。

人間は多くの境目に囲まれて生活している。現実世界には国家、民族、人種、宗教、思想、身分などの間に多くの境目が存在している。そこから多くの差別や偏見や対立も生まれてくる。そのような<境目>や<へだたり>を取り除くのが本来の宗教の役割であるが、現実には宗教が<境目>や<へだたり>や<対立>を生み出しているところがある。仏教における修行は<境目>にとらわれない訓練であるが、そのような訓練をしないと、そこから抜け出せないほど<境目>にとらわれる意識は執拗なものである。

「童心は聖心」といわれるように、幼児の心情は基本的には純粋性を特徴としている。しかし、幼児期は敏感期であり、早い時期から周囲の環境の否定的な影響を受けてしまう。したがって、宗教的情操を育てる上でも環境の構成や雰囲気の問題は重要である。幼児のばあいは、「言語」のような第二信号系の刺激よりも「感覚」のような第一信号系の刺激のほうが有効である。それゆえ、賛美歌や賛佛歌などの宗教音楽のような聴覚的なものや、絵画、彫刻、工芸、ビデオ、図鑑などのような視覚的なものや、手で触れるような触覚的なもの、などの配置や活用を考える必要がある。

4．四つの無量心

仏教には「四無量心」という教えがある。人間の四つの永遠の心、つぎることのない四つの

無尽蔵の心である。具体的には「慈・悲・喜・捨」の四つの心である。

(1) 慈無量心(maitri)

慈は「慈しむ」心である。慈の原語maitriマイトリイは「友」や「親愛なるもの」を意味するmitraミトラから派生したものである。万人にわけへだてなく持つ友情を原義とする。衆生をいつくしんで楽ややすらぎを与えることである。つまり「与楽」である。

母が自分の子を命をかけて護るように、すべての生きとし生けるものに対して慈しみの心を起こすことである。母体の羊水の中にいるような安全感や安心感を与えることである。上下左右の人々に対して分け隔てなく、怨みをもたず、敵意をもたずに慈しみの心を発揮することである。立っているときも、歩んでいるときも、坐っているときも、臥しているときも、起きているかぎりには、この慈しみの心をもって生活することである。常に全世界に対して限りない慈しみの思いがもてるように心を修すべきである。これが仏教の教えである。

(2) 悲無量心(karuna)

悲は「嘆き悲しむ」心である。

悲の原語karunaカルナーは嘆きを意味し、人の悲しみを我が悲しみとする同情を原義とする。「慈は楽を与えんと欲し、悲は苦を抜かんと欲するなり」(『大乘義章』11)と規定されているように、悲は人々の苦しみを抜き取る心である。つまり「抜苦」を意味する。佛の候補者としての菩薩は、あらゆる人々の苦しみを代わって受け、その人々に幸をもたらすことを使命とする。つまり、人々の苦しみを抜き取り、その人々に幸や楽を与えるのである。その意味では、菩薩はまさに慈悲の体現者である。

佛の心は慈悲の心である。佛の心は、すべてを知る智慧と、すべてを救う慈悲とでできている。慈悲の基本は無執着の心と自己中心性の排除である。佛は無縁の慈しみをもってもろもろの衆生を損する。それが慈悲である。有縁の愛ではなく、無縁の愛である。無縁の愛とは、特別の縁がなくても万人に平等に働く愛である。

(3) 喜無量心 (mudita)

喜は人の喜びや楽しみを「よろこぶ」心である。衆生に安らぎを与え、苦しみを取り除き、その実現を喜ぶ。喜の原語muditaムディターは歡喜、喜、喜心、発喜を意味する。「他の得樂を喜んで歡喜の心を生ずるを喜と云ふ」あるいは「衆生が樂を得るを見て少しも妬忌する心なく喜ぶこと」(中村 元『佛教語大辞典』)と考えられている。他人の喜びを共に喜ぶ心であり、他者を幸福にする喜びである。

(4) 捨無量心 (upekṣa)

捨は平静で「かたよらない」心である。

捨の原語upekṣaウペクサーは捨、棄捨、除捨、放捨、寛大などを意味する。かたよった心を捨てることであり、心が万人に対して平等であるということである。衆生を差別することなく平等に利することであり、愛憎や親怨などのような世俗の感情に左右されることなく心を平静に保つことである。捨が無量であれば、欲と貪りから遠ざかることができ、自ら財を捨てることができる。

捨はすべてのとらわれを捨てることであり、心を無量にし、無量の人々を悟りに導くことである。衆生に<縁起>の真理をさとらせることである。

捨の本質は不偏性である。

四無量心は、四つの無量の利他の心であり、

それによって衆生に無量の福をもたらすものである。これらの利他の心を幼児期から年齢や特性に合わせて育てていくことが大切である。

5. 豊かな人間性

中央教育審議会は、1998(平成10)年6月に「新しい時代を拓く心を育てるために」次世代を育てる心を失う危機のテーマの下に「幼児期からの心の教育の在り方」の答申を発表した。その中で、「子どもたちが身に付けるべき『生きる力』の核となる豊かな人間性」の内容として次の6項目を挙げている。

美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性

正義感や公正さを重んじる心

生命を大切にし、人権を尊重する心などの基本的な倫理観

他人を思いやる心や社会貢献の精神

自立心、自己抑制力、責任感

他者との共生や異質なものの寛容

そして、このような感性や心を子どもたちに育てるためには社会全体、家庭、地域社会、学校の現実を見直し、改めるべきことは改め、多様な工夫と努力が必要だとしている。社会全体の改めるべき事柄として次の5項目を指摘している。

社会全体や他人のことを考えず、専ら個人の利害得失を優先すること

他者への責任転嫁など、責任感が欠如していること

モノ・カネ等の物質的な価値や快樂を優先すること

夢や目標の実現に向けた努力、特に社会をよりよくしていこうとする真摯な努力を軽視すること

ゆとりの大切さを忘れ、専ら利便性や効率性を重視すること

「このような大人社会全体のモラルの低下を背景に、新しい時代への夢を語り、未来を切り拓く大切さを伝えようとしない大人、子どもに伝えるべき価値に確信を持ってない大人、しつけへの自信を喪失し、努力を避ける大人、子どもを育てることをわずらわしく感じる大人が増えている。子どもの心を育てるべき大人社会が、こうした『次世代を育てる心を失う危機』に直面していることこそ、我が国の抱えている根本的な問題である。」

教育は最初から最後まで人格の貫徹をめざすものであるが、資本の論理が優先する社会においては、指摘されているような弊害の多くはその社会から構造的に生み出されるものである。したがって、大人の自覚を促すだけでは不十分である。資本に対する政治的抑制や富の公正な分配や格差の是正など、社会のあり方と社会全体の見直しと総点検が必要である。

6. 心の発達の4つの特性

『子育ての変貌と次世代育成支援』のなかで心の発達の4つの特性が指摘されている。

(1) 個人差・性差

日本では価値観の多様化や個性化が指摘されるようになってから久しいが、現実にはむしろ画一性や均質性の強い国である。社会や学校などすべての領域においてそうである。制服、校則、修学旅行、運動会、遠足や、国体、高校総体など「みんな一緒」が顕著である。

カナダの親支援プログラム「Nobody is perfect」のキー・コンセプトは「価値観の尊重」と「体験から学ぶ」であり、個々人の「ちがいを前

提としている。

心の教育においては多様性は重要な原則であり、心の画一化はファシズムである。

(2) 積み重ね

心の発達には積み重ねが必要であり、発達の筋道が大切である。

人間や人間社会に対する基本的信頼感
(0歳児)

自律心(1～2歳児)

自発性・積極性・良心(3～5歳児)

学ぶ喜び・有能感(学童期)

自我同一性:アイデンティティ(思春期)

エリクソンのライフサイクル論を参考にすれば、人生の早い段階ではそれぞれの時期にそれぞれの発達課題があり、それは同時に心の発達課題でもある。心の発達においても順序性は大切である。

(3) 適時性

からだの発達と心の発達の間には深い関係がある。1～2歳ごろになると、自分で歩けるようになり、言葉も獲得しはじめる。身の自立が可能となり、自分でできる範囲が徐々に拡大されるようになる。そこから「自律心」も芽生えるようになる。発達のすべての領域において適時性の原則は重要である。その時期のそれぞれの心の発達課題にはそれぞれの適時や適期があるのである。その時期を逃すと他の時期では獲得しにくいのがその時期の発達課題である。

(4) 育ちなおし

人間の心は直線的に発達するのではない。行きつ戻りつしながら、ときには屈折しながら、ときには停滞しながら発達していくのである。母親の愛情確認のためにおこる「赤ちゃん返り」

や「退行現象」なども、そのような発達上の現れである。人間の心の発達とは全体的には基本的な発達段階にしたがって進んでいくが、ある時期のある条件の下では退行や停滞や逸脱が起こったりするのである。しかし、それぞれの時期の発達課題がしっかりと獲得されておれば、回復や軌道修正も容易だということである。

人間の発達においては、外的諸条件は内的諸条件を通して作用するというのが一般的な原則である。同じ環境の下で同じ影響を受けても個々人によってその影響の程度は異なるのである。非行や犯罪などはその典型である。それはそれぞれの内的諸条件が違うので、その影響の受け方も違うからである。それは非行少年の再教育においても同じである。同じ教育を受けてもその「育ちなおし」は違うのである。

7. 心の諸相

心はそれぞれどのように考えられているのであろうか。いくつかの文献や資料で確かめてみることにする。

『心を育てる幼児教育』（杉原一昭編）の中では次のような徳目を取り上げられている。

a. 自主性 b. 自信 c. やる気 d. がまんする心 e. 思いやり f. 道徳心 g. 友情・社会性 h. 情緒 i. 直観力 j. 好奇心 k. 話す力 l. 数への親しみ m. 文字への親しみ n. 絵の力 o. 考える力 p. 想像力 q. 遊ぶ力 r. 創造性 s. 注意集中力

以上の19項目である。

『道徳性の芽生えの育成 心を育てる幼児教育』（神長美津子編著）の中では次のようなテーマが取り上げられている。

a. 園生活の中で、基本的生活習慣を身に付

ける。

- b. 他者とのかかわりの中でよいことや悪いことに気付く。
- c. ルールやきまりを守って遊ぶ。
- d. 思いやりや信頼感をもつ。
- e. いざこざや葛藤を乗り越える。
- f. 友情のよさに気付き、かかわりを深める。
- g. みんなで協力することの大切さを学ぶ。
- h. 生命の尊さに気付く。
- i. 道徳性の芽生えを培うクラスをつくる。
- j. 保護者と協力する。
- k. 地域の人とかかわる。
- l. とともに育ち合う関係をはぐくむ。

以上の12テーマである。

『いま、親として 幼児期の家庭教育』の中では次のような内容が取り上げられている。

自立 情緒の安定 創造性 反抗
公衆道徳 ほめ方叱り方 持ち物や金銭の指導 子育ては親の責任 集団生活
遊び 物を大切に 耐える心 けんか
テレビの見方・生かし方 働く喜び 親は子どもの手本 情操 子どもの塾通い
子ども同士で遊ばせる 子どもの心の安定を ①共働き ②生活のリズム ③偏食・健康づくり ④病気 ⑤子どもの事故と安全教育 ⑥性教育 ⑦入学の準備 ⑧からだの発達 ⑨情緒の発達 ⑩ことばと数の発達 ⑪社会性の発達 ⑫基本的生活習慣の自立 ⑬家庭の変化と教育の課題 ⑭無意図的な教育の持つ役割 ⑮家族の役割と協力 ⑯家庭・幼稚園（保育所）・地域の協力

以上の36項目である。

『52の美德教育プログラム』（Linda kavelin popov著）の中では次のような美德が取り上げられている。

愛 いたわり 思いやり 感謝

寛大 寛容 気転 共感 協力 勤勉 決意 謙虚 コミットメント 識別 自己主張 自信 自制心 柔軟性 正直 情熱 ①真摯 ②親切 ③辛抱強さ ④信頼 ⑤信頼性 ⑥正義 ⑦清潔 ⑧誠実 ⑨整理整頓 ⑩責任 ⑪節度 ⑫創造性 ⑬尊敬 ⑭忠誠心 ⑮慎み ⑯手伝い ⑰忍耐 ⑱奉仕 ⑲無執着 ⑳名誉 ㉑目的意識 ㉒優しさ ㉓やすらぎ ㉔勇気 ㉕友好 ㉖優秀 ㉗ゆるし ㉘喜び ㉙理解 ㉚理想主義 ㉛礼儀 ㉜和

以上52の美德である。

これらの諸要素の中で、心の教育にとって特に大事だと思われるもののいくつかの要素を取り上げることにする。

(1) 想像力

想像力は人間の精神的な働きの基礎となるものである。日常生活や学習の中でイメージする能力はきわめて重要であるが、子どもの中で、この能力が著しく低下してきている。これは人間の特性の衰えである。想像は無目的性の要素がつよいばあいには空想となるが、問題解決に向けての目的性をもったばあいには創造的想像力や生産的想像力となる。それが発明や発見につながる。人類の文明や文化を支えてきた能力である。

想像力は人間の生活において大切な行動調整機能の役割を果たしている。行動の発動にも行動の抑制にも深くかかわっている。行動のアクセルにもなり、行動のブレーキにもなる。

いじめグループからいじめを受けていた少年の中に殺意が生じた。その日グループから呼び出しがあればグループの誰かを刺すつもりで家から包丁を隠して持参した。ところがその日にかぎって呼び出しがなかった。翌日も包丁を持

って行くつもりであった。しかし、毎朝小言を言いながら学校に送り出している母親の悲しみを想像したとき、そして殺された相手の家族の悲しみを想像したとき、その行動は抑制された。想像力が殺意にブレーキをかけたのである。

(2) 分け与える心と自制心

人間の重要な特性の一つは、「分け与える心」と「自制心」である。この二つは動物にはあまり見られない特性である。人間に近いサルであっても分け与える行動は見られない。バナナをもらったおとなのサルのあとをサル山のテッペンまで血縁のない二匹の子ザルがついて行ったが、バナナを分け与えるようなことはしなかった。好物であるとはいえ、全部自分で食べていた。「分け与える」は人間の重要な文化である。人間は物だけではなく、心も分け与える。「思いやり」は心の分け与えである。

「自制心」も人間の重要な特性である。猟犬のようにある程度訓練すれば動物も可能ではあるが、人間のように持続的で強力ではない。人間のばあいももちろん幼児期からの教育や訓練は必要である。自己制御能力は人間の重要なしるしであり、その育成は教育の重要な課題である。「キレる」子どもが増えているが、それは感情と行動の自己コントロールが訓練されていないからである。ブレーキが装置されていない車のようなものである。暴走は必定である。自己と他者に悲劇と不幸をもたらすだけである。

人間の教育は人間の特性の教育を基本とすることが大切である。

(3) 自主性と責任感

自主性と責任感の教育は人格形成の基本である。自主性や自立性は生活のあらゆる領域において重要である。自主性の原則は自主的に考え、

自主的に判断し、自主的に行動することである。人間がある課題を解決するとき、主体的に目標設定をし、主体的に判断や選択をし、主体的に行動して、その課題を個人的・集団的に解決していくことである。

責任感とは人格のもっとも重要な属性である。したがって、責任感の教育は人格教育の基本的な課題である。幼児がおもちゃで遊んだあと、そのおもちゃを元の場所に戻しておくのは責任感の教育の問題である。責任感の教育は幼児期から意図的・計画的に始める必要がある。

(4) 柔軟性と寛容性・寛大さ

心が柔軟性を失うと心は硬くなる。心が硬くなると心は問題を起こしやすくなる。言葉や態度や考えが極端になったり、物事に対する関心が狭くなったり、人のために心を使わなくなったり、人を許すことができなくなったり、自分を抑えることができなくなったり、待つことができなくなったり、問題行動をひきおこしたり、犯罪をおかしたりするようになる。

人間は一般的にあいまいであるが、乳幼児や子どもはとくにそうである。そうであれば、彼らに対する対応には一定の配慮が必要である。つまり、乳幼児も含めて人間がもっている「あいまいさに対する寛大さ」が必要である。その寛大さが欠如すると、虐待やいじめなどの子どもの受難がはじまる。心のしなやかさと寛容性は社会生活や集団生活を営む上では不可欠なものである。

(5) いのちを大切にすると感謝

「いのち」を広義で理解する必要がある。1つは生きている動植物の生命である。2つは生命を育てている土や水や太陽の光や空気などである。3つはこれらすべてを包含したものをい

のちとみなす見方である。人間は他のいのちによって活かされている存在であり、すべてのいのちを大切にする必要があり、それらに対して感謝する必要がある。仏教から派生した「いただきます」と「ごちそうさま」の言葉の中には食べ物と作ってくれた人に対する感謝の意が含まれている。

感謝の心は万物に対して持つ必要がある。われわれの身近にあるものは人間の労働によって創造されたものである。ものに対する感謝は人間の労働に対する感謝でもある。感謝の心は大変衰えやすい感情であり、幼児期からていねいに、しっかり育てていく必要がある。過剰社会の中でモノが食べ物も含めて粗末にあつかわれているので、あらゆる場面で、あらゆるモノに対して<モットイナイ>の感情や意識を意図的に育てていく必要がある。

沖原 豊は『新・心の教育』の中で「心の教育」に関連していくつかの重要な指摘をしている。

1つは、現代社会を「許容社会」(子どもの問題行動に対してあまりにも許容的、黙認的、放任的な社会)と位置づけて、その社会の教育の特徴として次の4つを指摘している。

強制・制限しない教育

大目に見る教育

叱らない教育

罰しない教育

2つは、学校掃除の重要性を指摘し、その教育的意義として次の5つをあげている。

人間形成

清潔に対する態度・習慣の育成

健康の増進

公共心・協調心の育成

勤労の価値の学習

3つは、心の教育と豊かな人間性を育てるた

めに次のような教育内容や方策を提言している。

心身をきたえること。

抑制の心を養うこと。

子どもに対してできるだけよい環境を与えること。

子どもの豊かな人間性を育てること。

a. 子どもの環境の情操化をはかること。

b. 子どもに多くの感動体験を与えること。

c. 歌ったり，踊ったり，描いたりすることによって，子どもの美的情操を高めること。

それぞれ大事な提言であり，方策である。

引用・参考文献

- (1) 原田正文：子育ての変貌と次世代育成支援 名古屋大学出版会 2006
- (2) 服部祥子・原田正文：乳幼児の心身発達と環境 名古屋大学出版会 1991
- (3) 杉原一昭編：心を育てる幼児教育 教育出版 1989
- (4) 神長美津子編：道徳性の芽生えの育成 心を育てる幼児教育 東洋館出版社 2004
- (5) リンダ・カヴェリン・ボポフ著 大内 博訳：52の美德教育プログラム 太陽出版 2005
- (6) 大須賀発蔵：心の架け橋 柏樹社 2000
- (7) 広岡キミエ：幼児の内面を育てる ひとなる書房 1987
- (8) 子安増生・服部敬子・郷式 徹：幼児が「心」に出会うとき 有斐閣 2000
- (9) 主婦の友社編：子どものココロがわかる本 1997
- (10) 岡田正章・森上史朗編：保育基本用語事典 第一法規 1980
- (11) 教育思想史学会編：教育思想事典 勁草書房 2000
- (12) 沖原 豊：新・心の教育 学陽書房 1997
- (13) 中村 元：佛教語大辞典(全4巻) 東京書籍 1975
- (14) 東京都教育委員会：いま，親として 幼児期の家庭教育 1982
- (15) 文部科学省：幼稚園における道徳性の芽生えを培うための事例集 2001
- (16) 速水敏子：こころを育てる子育て15の方法 大阪保育研究所 2001

資料

「新しい時代を拓く心を育てるために」
次世代を育てる心を失う危機

中央教育審議会「幼児期からの心の教育の在り方について」(答申要旨)

第1章 未来に向けてもう一度我々の足元を見直そう

(1) 「生きる力」を身に付け、新しい時代を拓く積極的な心を育てよう

(2) 正義感・倫理観や思いやりの心など豊かな人間性をはぐくもう

(3) 社会全体のモラルの低下を問い直そう

第2章 もう一度家庭を見直そう

家庭の在り方を問い直そう

(a) 思いやりのある明るい家庭をつくろう 子どもたちが真にそれ
をのぞんでいる

(b) 夫婦間で一致協力して子育てをしよう

(c) 会話を増やし、家庭の絆を深めよう

(d) 家族一緒にの食事を大切にしよう

(e) 過干渉をやめよう

(f) 父親の影響力を大切にしよう

(g) ひとり親家庭も自信をもって子育てをしよう

悪いことは悪いとしっかりしつけよう

(a) やっていけないことや間違っただけはしっかり正そう

(b) 自分の行いには責任があるということに気付かせよう

(c) 自分の子だけによいという考え方をやめよう

(d) 思春期の子どもから逃げず、正面から向かい合おう

(e) 「普通の子」の「いきなり型」非行の前にあるサインを見逃さ
ないようにしよう

(f) 身の回りの小さなことから、環境を大切にする心を育てよう

思いやりのある子どもを育てよう

(a) 祖父母を大切にする親の姿を見せよう

(b) 手助けの必要な人を思いやるようにしよう

(c) 差別や偏見は許されないことに気付かせよう

(d) 生き物との触れ合いを通して、命の大切さを実感させよう

(e) 幼児には親が本を読んで聞かせよう

子どもの個性を大切に、未来への夢を持たせよう

(a) 幼児期から子どもの平均値や相対的な順位にとらわれることを
やめよう

(b) 子どものよいところをほめて伸ばそう

(c) 人間としての生き方やこれからの社会について子どもに語りか
け、子どもの将来の夢と希望を聞こう

家庭で守るべきルールをつくろう

(a) それぞれの家庭で生活のきまりやルールをつくろう

(b) 幼児期から小さくとも家事を担わせ、責任感や自立心を育てよ
う

(c) 朝の「おはよう」から始めて礼儀を身に付けさせよう

(d) 子どもに我慢を覚えさせよう モノの買い与え過ぎは、子ども
の心をゆがめる

(e) 家庭内の年中行事や催事を見直そう

(f) 子ども部屋を閉ざさないようにしよう

(g) 無制限にテレビやテレビゲームに浸らせないようにしよう

(h) 暴力や性に関するテレビ・ビデオの視聴に親が介入・関与をし
よう

遊びの重要性を再認識しよう

(a) 「遊び」が特に幼児期から小学生段階で大切なことを認識しよ
う

(b) 自然の中で伸びやかに遊ばせよう

(c) 心の成長をゆがめる知育に偏った早期教育を考え直そう

(d) 子どもの生活に時間とゆとりを与えよう

異年齢集団で切磋琢磨する機会に積極的に参加させよう

第3章 地域社会の力を生かそう

(1) 地域で子育てを支援しよう

(a) どの親も通過する母子保健の機会を積極的に生かそう

(b) 24時間親が気軽に悩みも相談できる体制づくりをしよう

(c) 家庭教育カウンセラーを配置し、子育て支援に活用しよう

(d) 子どもの電話相談窓口を広げよう

(e) 中・高校生がもっと乳幼児と触れ合う機会をつくろう

(f) 家庭教育の学習機会を幅広く提供しよう

(g) 企業中心社会から「家族に優しい社会」への転換を図ろう

(2) 異年齢集団の中で子どもたちに豊多彩な体験の機会を与
えよう

長期の自然体験活動を振興しよう

(a) 民間の力を生かして長期の自然体験プログラムを提供しよう

(b) 親と離れて子どもたちが集団生活を営む「長期自然体験村」を
設置しよう

(c) 「山村留学」や「国内ホームステイ」の取り組みを広げよう

ボランティア・スポーツ・文化活動、青少年団体の活動等を
活発に展開しよう

(a) 自分の大切さに気付かせ、社会貢献の心をはぐくむボランティ
ア活動を振興しよう

(b) スポーツ・文化活動や青少年団体の活動を積極的に展開しよう

(c) 学校は、学校外活動に関する情報提供を行い、参加を奨励しよ
う

(d) 自由に冒険のできる遊び場をつくろう 「ギャングエイジ」に
ふさわしい遊びを

地域の行事や様々な職業に関する体験の機会を広げよう

(a) 地域の行事に子どもたちをもっと参加させよう

(b) 会社や工場での子どもたちの見学・体験活動を広げよう

(c) 職場見学の機会を拡大し、働く父母の姿を見せよう

情報提供システムを工夫し、子どもたちの体験活動への参加
を可能にしよう

(3) 子どもの心に影響を与える有害情報の問題に取り組もう

(a) テレビ・ビデオ等の関係者による自主規制などの取り組みを進
めよう

(b) 業界団体とPTA等の教育関係団体との定期的な協議の場を設け
よう

(c) 有害情報から子どもを守る仕組みをつくろう

(d) 有害情報の問題についての住民による積極的な取り組みを進め
よう

(資料作成：照屋敏勝)